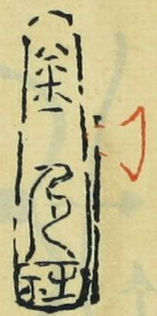
歌集山上湖上

全

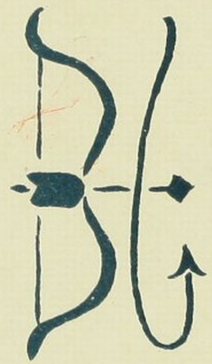
東京金色社發行



歌集山上湖上

全

東京金色社發行



# 山

# 上

# 自序

眼にもみぬ耳にもきかぬ手にも獲ぬ
もののひとつをしたひこそすれ

# 山上

山上は山上の集なり、太田みづほのや氏、千曲川のほとりに行吟して新聲一巻を成す、我れすなはち爐邊の雜興をとりて其はしにかきつく。

あら荒くれたる賤の山住や、顔も黒し、手も黒し、すゝ〳〵と林の中を歸る藁草履の土にまみれたるよ。

こゝには五十路六十路を經つゝまだ海知らぬ人々ぞ多き。

炭燒の烟をながめつゝ世の移り變るも知らで谷陰にぞ住める。

蒲公英の黄に蕗の花の白きを踏みつゝ慣れし其足
何ぞ野獣の如き。
岡のべに通ふ路には野苺の實を垂るゝあり、摘みて
舌うちして年を經にけり。
和布賣の越後の女、三々五々群をなして來る、呼びて
窗に倚りて海の藻を買ふぞゆかしき。
大豆を賣りて皿の上に載せたる鹽鮭の肉、鹽鮭何の
磯の香もなき。
年々の暦と共に煤けたる錦繪を見れば海あり
き、廣重の筆なりき。
爺は波を知らず、婆は潮の音を知らず、孫は千鳥を鵜
の雛かとぞ思ふ。

たま〳〵伊勢詣のしるしにとて送られし貝の一ひ
らを見れば、大わだつみのよろづの波を彫めるとぞ
言ひし言の葉こそ思ひいでらるれ。
品川の沖によるといふなる海苔の新しきは、先づ棚
の佛にまゐらせて、山家にありて遠く海草の香をか
ぐとぞいふばかりなる。

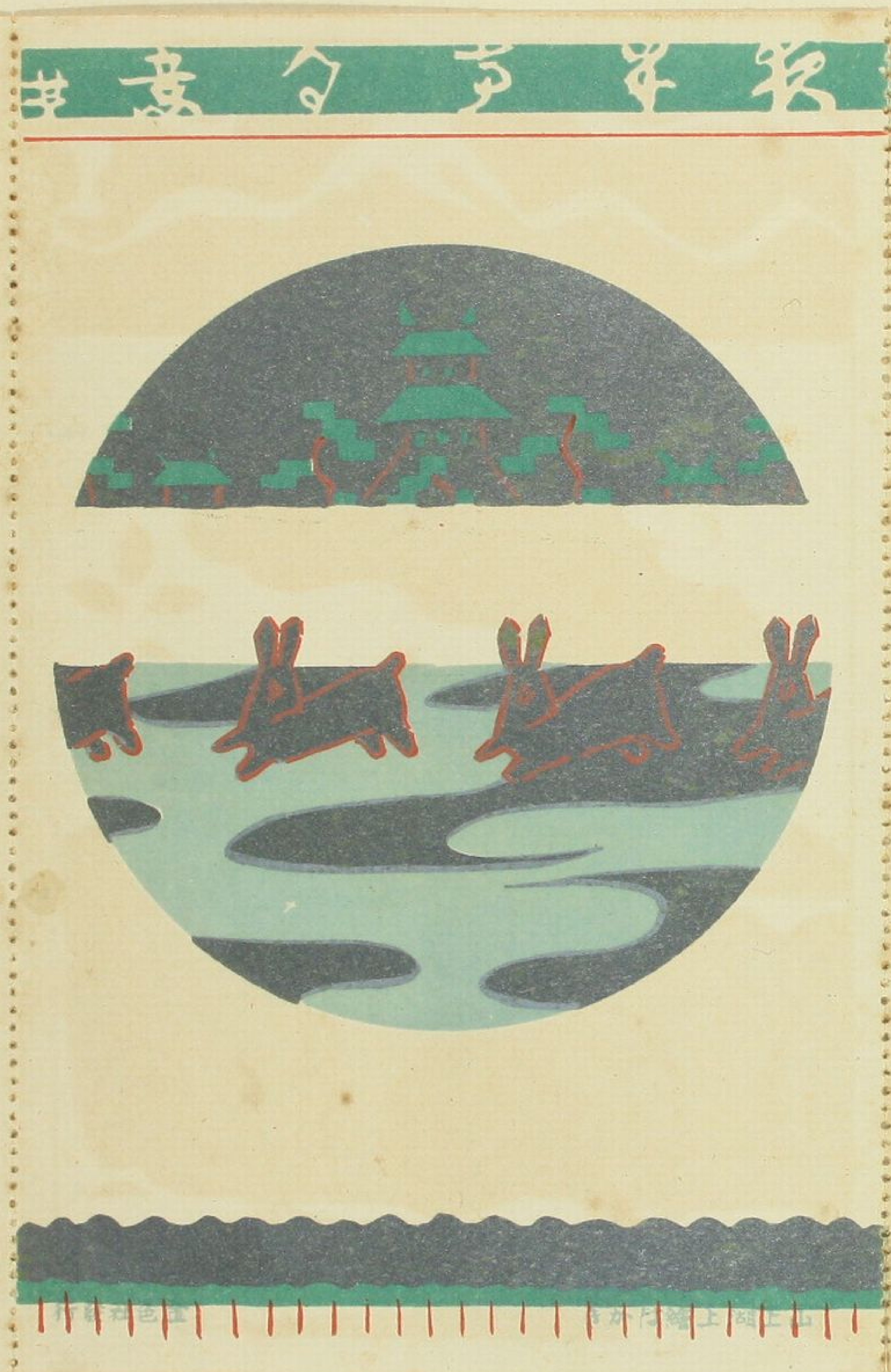
藤村

CARTE POSTALE

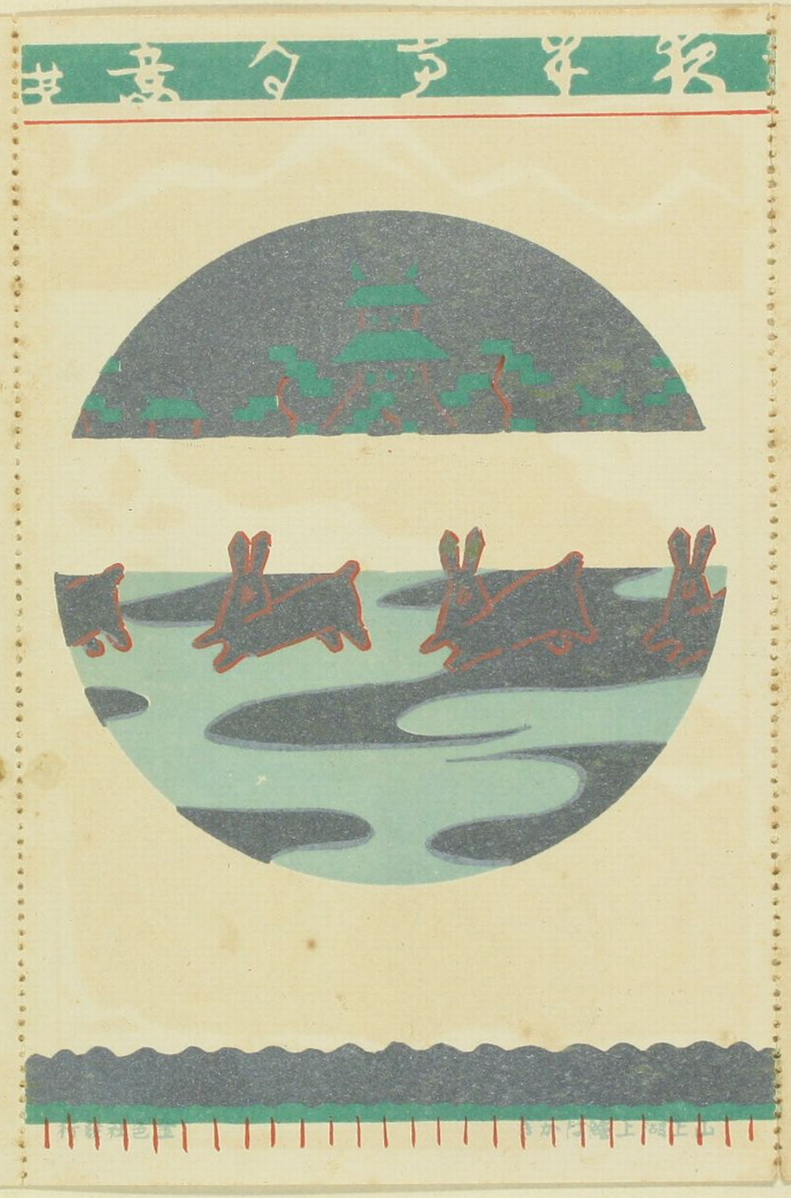
郵便はがき

内國には壹錢五厘
外國へは四錢切手

山上湖上繪はかき


山上湖上繪はかき

山上湖上繪はがき
金色社發行


山上湖上繪はがき
金色社發行

目次

透垣
海邊の朝
立秋
野花
梭聲
哀歌
君の心
朝虹
あわたゞし
海苞
小雨月
上毛野

郵便はがき

内國には壹錢五厘
外國へは四錢切手

CARTE POSTALE

かげろふ
戀辻
旅情
餞の歌
人々の挽歌に
草の戸
低廻
海の秋
はぐれ鳥
さる人のうたへる歌
袖几帳
筑摩よさらば
番ひ羽
杜外を送る



# 山上

## 透垣

みづほのや

さみしさに脊戸のゆふべをいてゝ見つ河楊白き秋風の村

朝顔は小さく咲きて明け方の透垣くゞる秋鳥のこゑ

吹きやみし野分のあとの蓬生にまひたちあへ
ぬ黄の一羽蝶

木葉かへし蓬野みだし吹く風の野分のあとの
有明月夜

水に沈む秋ひとひらの黄色雲音なき寺の庭の
眞晝日

向つをに夕日かぎろひ眼もはるの河原蓬に秋
風なびく



さし向ふ椽の月夜やおもぶせの小扇もるゝ君
が細眉

萩の葉に來ては萎るゝ夕ぐれの野に吹く風を
やさしとぞ見し

星がなす契りの宮のよそひかや夢とあはげの
空めぐる月

立ちよれば露ぞこぼるゝ朝顔に人のうれひも
美しの秋

玉蜀黍の廣葉がうれをなびかして今宵ぞ吹け
る初秋の風

こほろぎは月夜すゞしみ露草の葉がひの秋を
鳴くにかあるらむ

來ては吹きふきては去りて秋の風小萩がもと
を住みもかねつゝ

このねぬる朝の寢ざめの蚊帳ながら吹かれて
空の雲見る心地



來れ〳〵をゝしく強くいさぎよく樂しき秋よ
早も走り來

なさけしる君に見せずばやまれざる歌はあれ
どもえぞかきあへぬ

痛せて倚るまがきがもとのわれは蝶かや君が
灯影をたゞ慕ひぬれ

秋虫は月がてらせる面かげのひとりが宿をめ
ぐりて鳴くらむ

# 海邊の朝

さやかなる波の音に
さめいてよ眠げの小貝
明け方の日の光りは
大海に溢れてみちぬ

たゞず來ては磯の干潟に
小さなる砂とたはむれ
溢れては又落ち返る
東雲の波のきよけさ



見よ朝は磯の眞砂を
やゝやゝに西に歩みて
波近きあらゝ小松に
うす藍の色とあらはれ

ほの暗き沖に出でゝは
白き藻の花と咲きつゝ
離れ洲の葦のこち〳〵
このねぬる風と戰ぎぬ

さめよ〳〵眠げの小貝
朝は野に海に溢れぬ

さやかなる汐と浮びて
見よ走る光りの影を

夢ごもる底の小貝もさめ出でゝ
このゆたかなる日に向ふらむ

## 立秋

秋は來ぬ
汀の荻にこゑたてゝ
みるめの草を靡して

潮とともに來る秋の
色こそさやにみちにけれ

秋は來ぬ
大空高きほそ雲の
漂ふ末にあらはれて
夕日と匂ひ來る秋の
黄に流れたる海の上

秋は來ぬ
杜の梢に木の陰に
葎の床に葦が根に

舞ひて見せたる海鳥(うなどり)に
かくれてにぐる蛇(くちなは)に

秋は來ぬ
見よさやかなる風の音(ね)は
み空の星の梭(をさ)に入り
秋のひゞきと現れて
落ちて潮と寄せ來るを

秋は來ぬ
嗚呼(あゝ)天が下地(つち)の上
眼(め)に見ぬ神の手にもれぬ

萬の物の色に音に
秋は溢れて豐かなるかな

## 野花

あかで人に別れせわしやあわたゞしや朝は霞
のまだ夢心地

夢とあひ夢と別れはつらかりき花ほの白き明
け方の空

うながして人と立ち見る温泉(ゆ)の欄干(おばしま)あは〳〵

君見ませ草ごもりゆくさゝ川もゑみて野花の
紅きによどむ

うつくしき我が歡びの通ひ路に笑みつゝ花も
さゆらぐらしき

日影あびて野にひるがへる春花の笑みておは
さむ君とこそ思へ



打ちかすむ春の花野の月影に御袖をあげよ舞(まひ)
の姫み子

相見ては笑みてゐるまさむ相笑みてはうつむき
まさむ二人ならまし

眼にうかぶ天(そら)の物みな地(ち)の物みなたゞ美しと
君見ますべし

と見れば面影花に又消にぬこや臘夜の月人
男

若うして花に靴もつ女子に薄眉ずみは忌むべき色か

わが門の一本柳風うごく君が夢なる蝶よ舞ひ來よ

黄は山吹戸は雨ふくむ梨木立人のおごりの春くるゝ空

梅が香に泌みて佇む少女さび藪のうぐひす人に來て添へ



あひ見ては驚かれぬる痣せやうや大丈夫さび
て歌はうたへども

ゆくりなきそぐろあるぎにふといてし小路の
家をそれかとも見つ

情とき我れやさながら秋風にふるへてゆらぐ
花にも似ずや

いたましきわが來し方の思ひ出はやぶれし珠
を惜むにも似つ

別れても君はわが身に吾は君に影はかたみに
添はむとすらむ

わがおもひは夢に入りぬる幻の影なる影を追
うてぞ走る

よろこびは小さき君が胸にしも溢れてみちて
潮とわくらむ

とれもひぬ別るゝことも逢ふことも皆天地の
神のたはむれ



影は身に戀は二人にろふれもひ被衣姿の君と
行く道

## 校聲

星白く夜はさながらに明けにけり菊を流るゝ
秋河の村

あらはなる落葉の杜の月影に魑魅よ何の隈に
かくるゝ

木枯に神子の御座はもみぢ葉は吹かれて空に
飜るかな

小さき神の耀きの御座と仰ぐかな夕日照り透
く黄葉くれなゐ葉

もみぢ葉に山は寂寞の日の光このとき鳥の動
かば鳴かば

行く秋を見てゞ佇む西の野邊野末に圓き面か
げの岡



君として野邊の行くさの歌に見し落葉の杜の
夕鳥のこゑ

その杜のこずゑ〳〵をどよもして落葉にしづ
む秋の夜の鐘

校にきく誰れ森かげの賤の子に秋を興ある歌
は授けし

菊多き戸の秋河の小石がくり透きて清げの宵
のさゞれ星

秋を鳴く落葉の杜のひえ鳥のしほれ姿の君か
や身かや

こぼれちる夕日の岡のもみぢ葉とともに吹か
るゝ小さき秋の神

ひとりゐのみ寺はさみしかゝる夜を杜の小狐
人謀らずや

あまさかる鄙の里居にふときゝてさみしくな
りぬ蓬織る歌



みづ〳〵し松のうれ葉の露の玉一鳥啼いて幽
なる山路

## 哀歌

君が哀歌を口ずさみつゝ
さみしやわれも泣かれぬる
おなじ宿世に生れこし
想ひの國のはぐれ鳥

小草の床を巣と占めて

終日歌はうたへども
情は高きみ園生の
香にこがれよるはぐれ鳥

## 君の心

哀しと君はいひますか
憂ひよりこそ老も來れ
和手かざしてふりかゝる
君黑髪をかきあげよ



つらしと君はいひますか
思ひよりこそ年もゆけ
口紅染めてれぼめきの
君、春の夜をうたはずや

戀は若やぐ思ひより
歌はおぼめく戀路より
われを導く歡びの
光りは君の心より

## 朝虹

こひしの君と思へども
やさしの君と思へども
あゝ朝虹(あさにじ)の眼に見えて
さしも捕られぬ面影よ

こゝにと見れば彼處(かしこ)行き
彼處とれへばこゝに見え
たゞよひ浮ぶ幻の
かゞやく影のまばゆさよ



あはれ夕べの星影も
招くに落つるためしあり
君がつれなきみ心も
慕ふになどか落ちざらむ

## あわたゞし

影とより道の手引とたのめてし君は我身の姉
ならぬかは

慰めは君がやさしき言葉より情は君が心より
得し

別れてはこゝなる里の草も木も萎れて君が方
によるらむ

君もはた影と消え行く幻の夢の中なるえにし
にもれじ

佇めば大わだつみの汐さいに立ちかへる春の
音ぞどよめる



みだれ咲く花の梢の夕風に吹かれ消ゆらむ細
眉月夜

わが庭の春低青垣葉ごもりに面影見えて鳴け
る鶯

かへり來てながむる庭の若葉蔭ちりにし花の
あともとゞめず

人去らせてひとり風きく宵闇のあわたゞしさ
も趣ある夜

閨(ねや)の戸の若葉さやめく宵闇に小さう倚りにし
人も來ぬかな

別れては再びあはむ夕ぐれを命(いのち)の宿とたゞ
どるこひ

行く春の嵐ぞあそぶ若葉垣しきりに花のこぼ
るゝ夕べ

さびしげに春ぞくれゆく垣根(かきね)路(みち)こぼれて花の
白きゆふまぐれ

空は紅(くれなゐ)につちはみどりに今朝來るきらゝや春
の若やぎ姿

逃れ來て今もいこへど若草にさりにし夢のか
へらぬかなや

かへり來ては若葉(わかば)青草(あをぐさ)香にみちて我が世幼き
こや夢見空

うすものに京は風知る橋すゞみ去年(こぞ)のひとり
の君に似まさぬ

わが園の垣根みだるゝ夏草にねもかげだにも
見えぬ君かな

情ある君がみ唇(くち)にうたはれて酒ともわかむわ
が幼歌

ゆうべ見し夢の名殘にほゝゑみぬ春朝河の水
に白む月



## 海 萱 (一)

おごそかなる物とたゞ見る夕暮の大わだつみ
を流るゝ日の影

汐なわに袂しめりて海の香にさまよふ夜こそ
おかしかりけれ

よせかへりかつくづれゆく磯花の波にやあへ
むおのがおもひは

別れ來ては又危くも物ぞれもふ笑みてこゝに
も人は住めども

朝霧に夜(よる)は殘りて岡ごえの青葉下道なくほと
ゝぎす

さみどりの若葉木立に風そよぎゆらゝにゆら
ぐ眞玉しらつゆ

さらぼひて海に網ひくあさましの海人(あま)が嫗(おうな)に
以ても立つ松



父母(ちゝはゝ)の國さかり來てとほ〳〵し安房の少女の
歌になくよひ

さびしければ海の干潟に立ちつくしさもなき
海人が唄(うた)もきかるゝ

ゆふぐれの海の靜に似ても見ゆるあらゝ小松
の草にゐる牛

雲は西に流れて汐はかへりけり人は渚(なぎさ)の草に
いこへる

あめつちをうしはく神のふところに今宵は海
の静なるかな

たゑず來ては磯の小貝をもてあそぶ小さき波
も海のものかな

さびしうてわが立つ磯の眞砂路に波も靜にい
ざよへとこそ

ひそみおはす海の女君も月に出てゝ波のほな
から立ちて舞ふらむ



やゝぬるゝ磯のいさごや朝雨の松が根這へる
小蟹の一つ

おぼめきて立てるは海のさゞら波夢見心地の
こよひの月夜

おもしろき今宵の月にもしやその沖の小島の
浮きてあそばゞ

## 海苞（二）

明け方の月をうかべてねむれりし面影見えず
荒るゝ海づら

安房の海や渚の荻に吹き初めて秋づく風に荒
るゝ海面

打ちむれて網ひく浦の海人(あま)少女(をとめ)伊豆男の戀に
泣く夜もあらむ

船よする島のいくり(たま)は玉楠(くす)の水枝(みづえ)かざしてす
ずしかりけり



わが歸る都のつとに謠はずや安房の里びの小
唄の一つ

大海に濤はあふれてかへるなりなど人の思ひ
もせきあへぬ宵

酔うてねむる旅のやかたの夢にしも通はゞい
かに故郷の子の

はかなくも物に動(どう)ずる鹿の子にぞ似ても覺ゆ
る君がひとみは

かぐはしき詩歌の料にえらむべき夢かのさま
の磯に佇む

怖しき物に追はるゝ心地して戀の火宅をにげ
ても來つる

暮れはてゝ海や空なるをちかたの波間にほひ
て照れる夕づゝ

富士の神のよるを守るとわだつみのか黒天雲
きほひて立てり



日入りてみ空の雲のくれなゐに匂ふしばしを
わが世といはむ

尊さに御手合はさるゝ心地しつ富士むらさき
に雲匂ふ海

海近き岡邊の合歡木ははしきやししぶきの風
に木末うちふる

小松原月にすかせばほのめきて人かの樣にゆ
らぐ白百合

忘れては[こ]や故郷の山かともはかな心地によ
びても見つる

わが胸のたぎつおもひをさながらによせては
かへす沖の大濤

いつの世に流れはじめていつまでか海の潮は
あふれて湧くらむ

わだつみの神のみる目もつゝましき佳[よ]き子が
肌[はだ]に衣[ころも]きせましを



## 小雨月

ぬば玉の夜汽車とゞまる姨捨[をばすて]の小雨月夜[こさめづきよ]をな
くほとゝぎす

白百合に朝霧おもき峠道草野の湖[うみ]に夜ぞ明け
かぬる

月に吹く磯の笛の音[ね]海に入りてきゝのかしこ
き波とよるらむ

呼びとめて馬子に道きく夏山の木の下陰の小
さき流れ

眼にさゆる秀つ高みねの雪のむれ高瀬の河の
青く流るゝ

夕ぐれの日影かゝよふ眞白壁松原越の江に近
き家

いこひよる夏野はかげもなかりけり白き光り
の石にかゞやく



ひとり行くさびしの旅ぞ野にひそむ兎が伴も
われに走り來

目路遠き青一刷毛の山の眉とすれば雲にまぎ
るゝおもひ

とこしへに人に怖るゝ蛇のつたなき幸は誰が
授けにし

武夫の矢筈が岳の峯さらずいざよふ雲に入り
日さしぬれ

あさ〳〵の木の葉さわたり山の峽の溫泉の香
かぎよる山彦男

一本の葉廣かしはにおくつゆの朝もゆら〳〵
夕もゆら〳〵

おく山の繁木が闇にひそみゐる木精が月にな
くほとゝぎす

千曲川岸のうばらに春行きて卯木に老いし渡
守る子よ

ゆくりなく千曲の河の岸に出てぬ野ばらにあ
はき更科月夜

その岡を東にめぐる千曲川茨野におこる欵乃
のこゑ

## 上毛野

秋ぎりの上毛野行き科野行き萩にさみしき思
ひもする旅

君が行く都のつとに碓氷野の小萩が花を奉る

旅

温泉の宿の雨戸かゝぐるよひやみの芭蕉にそよぐ秋風のこゑ

雨にこもる毛野のいで湯の一夜宿親みがほの床の秋萩

上つ毛の毛野の出で湯のさまよひに摘みし小草を袂にひめぬ



秋草の花野をしみなつかしみ立ちてわが見し上つ毛の國

小百合さく妙義の山のふもと原立ちてわが見し筑波繁山

天つ神降りて國見し上つ毛の岩門の山は行きもかねつる

萬代の杉の繁山さみしさの秋を鳴きたるかさぎのこゑ

秩父嶺はそこともわかず天雲の棚引くをちの
檜原松原

名ぐはしの毛野の神山のぼり立ち見れども見
ねず君が住む國

千早振杉の神山檜木山きゝのかしこき鳥もこ
そ鳴け

## かげろふ

われは陽炎春日にもえて
終日君が門に立ち
君が園生の花小草
小草が上をこがれよる

或る日園生の草がくれ
ふと失ひしおも影よ
もとより影の君なれば
かしこにこゝに見え隠れ

かしこにこゝに徃きかへり
再び園のませ垣に

拾ひてつみし花小草
小草を守りてけふも終日

## 戀辻

ひとりの君に情(なさけ)を見
ひとりの君に才を見る
ひとりの君に親み見
ひとりの君に畏れ見る
親むからにろひ易く
畏るゝからにあひ難し
情 尊み 二すぢの
戀路の辻にさ迷ふ我は

## 旅情

新し一き人のうれひを秋風はいとそゞろにも驚かすらむ

見渡せば雲ぞにほへる淺間山(あさまやま)こやなつかしの北佐久(きたさく)の秋

町を出でゝ秋草なびく廣野原一筋道を碓氷に
越ゆる

上つ毛の岩山いぶく天つ風にくづれて北に飛
ぶ炎かな

初秋の月夜おかしき南佐久千曲を越えて東す
る旅

水は藍に花みな白き千曲川柳に低き秋の山見
る



來れ〳〵み空の秋よ地の秋よはなれていにし
我が魂よ

東(ひんがし)に君が慕へるよき人のひとりにわれも似む
とこそおもへ

風吹けば小首うごかし女郎花人のうれひの
に似るかや

こゝにしてたどれば長き野や山や君も想ひの
末にまぎるゝ

野の寺の秋のかゞひのめぐし子に來ても佇む
母のみ魂か

浮べるはいと美しき濃紅雲(こくれなるぐも)しづむは美濃の薄
藍の山

相そひて秋に笑むなるうつくしの二人がなか
の旅ならぬかな



## 餞の歌

さみしければ秋の野山の草に木にゆく〳〵つ
ゞる涙なるらむ

かへり見ては身はさみしみに悲みに消えも入
りなむ物憂(ものう)の別れ

こゝにして君をおもへば面影もたゞほのかな
る夢とはかなむ

ひとり寢の旅ねの夢のさみしくばかくれて人
の香にしたひよれ

君はしも情ことなる一人ぞとかねて深野(ふけの)に惜
みにし才

れもひ出てずやありし集(つど)ひの歌語り出て湯の
宿の花に明けし夜

君が才は君が旅路の思ひ出を皆かぐはしの詩
とかざるらむ

今宵しも楽しかりにし憂かりにし其のおもひ
出に沈みてゐまさむ



雪ぐもり日影もうすき冬山の落葉小徑(こみち)をいか
に行くらむ

## 人々の挽歌に

父母は未だ見ざりし女子(なご)の情一つを惜ませた
まはむ

少女(をとめ)なればまだ百年(もゝとせ)の幸を心づようも捨てゝ
去りにし

たましひはなれが慕へるうつくしの想ひの國
の野をや逝くらむ

○

はしきやし天のめづ子は秋草の小萩がもとを
奥津城とせり

別れ來しみ母を慕ひ父をこひ常世の坂に袂ふ
りけむ



## 草の戸

東の草の戸を開けて
光りの前に走り行く
君歡びの別れ歌
われや歎きの小草守

小草はもえて日の影に
もとの夢路をこがれつゝ
君がみ空になびけども
つゆけき眉に慕へども

君は光りの天つ御子
おごりに戀も忘れては

われや深野の小草守
園守る身こそさみしけれ

## 低廻

ひとりの君は智慧の灯を
心の宮居高うあげ
ひとりの君は詩の才の
情さながら火と燃ゆる
ひとりの君は臘夜の

月夜ほのめく花に似て
ひとりの君はいなびめの
東雲(しののめ)生(あ)るゝ蓮の花

あゝ春花に夏花に
何れこがるゝ身なればや
かなたこなたにむすぼれて
二つが中を行きつ戻りつ

## 海の秋

かの青き空のかゞみにあらはれてさやかに秋
の來るを見ずや

立ち初めてきのふか吹ける秋風にわかれまひ
行く夏迷ひ雲

大海の果てより來る風あびて良き夜の海の岸
に佇む

右手につゞく松の並木のこずゑより秋の海見
る車の旅路



シヽリアの火を噴く山にをのゝきし詩歌の人
の情知る旅　（即興詩人をおもひて）

海に來て聞くは船作ぐ老の歌こやさながらの
太古のおもひ

かづきては波に息づくあさましの海人がをと
めに眼ぞ掩はるゝ

ひるがへる風に木の葉の心地して命の船のた
だよふ姿

ほのかなる月の光りに照らされてさまよふ宵
の海の潮時

君が眼よ沈みて深きわだつみの底にかゞやく
珠にも似ずや

岩は皆吹きさらされて死の影を吊ふ墓の白き
に似たり

菅笠に折りかざしても慰みぬ桔梗は君のよし
といひし色



竹多き安房の旅路は菅笠も涼しき風に吹かれ
てぞ行く

萱の葉にわびて立ちにし故郷の秋風のねを棕
梠にきく旅

ひそみては胸に泌み入る憂き秋の思ひよ人を
老に走らしむ

東路の安房の少女は男の子なれやおちゐもか
ねて海路を走る

透きて青き底のいさごにあらはれて海より秋
の來るを見ずや

細雲の黄雲の末にほの見えてみ空を秋の來る
を見ずや

旅なればふとふれあひし袖にだにつゝみもあ
へぬ情知るわれ

ひとり身の旅におぼゆる憂き思ひ干潟に鳥よ
をちかへり鳴け



夕ぐれのあるおもひよりいつも行きてさ迷ひ
たりし松原やそれ　（海に別るゝとて）

逃れ來ては汝がやわらぎの香にゑみぬ波に笑
みぬる海よさらば〳〵

## はぐれ鳥

眼は眼をよび心心をよびさますさりやうれひ
のこひはぐれ鳥

わがおもひは渚落ちゆく海汐のうれひを引き
てたゞ沈むなる

あたゝかう落葉にこもりちゝとなき脊をよぶ
鳥に宿かさむかな

狹うして胸は思ひを捕へ得ず朝鳥とこそ君と
びめぐれ

この思ひたゞよふ影を追うて走り眼に見ぬ影
を纏ひてぞ飛ぶ



朝の戸に來てはさへづる萎れ鳥うれひの人に
伏目にそひぬ

あと趁うて山路にあへぎ海に呼びかくてかへ
らぬ野のめしひ鳥

我が心波にともなひ沖に出でいとはるかなる
海路を走る

ゆらぎてはあな疾もきえしかげなれば夢とれ
しむになほまどふべし

ひろひしは汝が失ひし物の影夢のはぐれの魂
よかへり來(こ)

朝霧にうすあゐ流す出で湯山(ゆやま)みねの冬木も生(い)
きてぞ動く

戀すでに汝が身をはなれ何處にか若き二人を
醉はしむるらむ

たへがたう時雨るゝ宵のさみしさや魂ぬけて
いづくをかける



落葉うつ夜半のみぞれの音さやゝかやわらか
う寄る人とまどひぬ

とづれども眼(まなこ)まばゆくはらへどもかゞやく物
のえぞさりあへぬ

人知れぬなげき(き)につゞる涙をもたゞ君のみぞ
知りてゐまさむ

## さる人のうたへる歌（二）

ありし夜のそれさながらの月の前(まへ)れもかげだ
にも見えよや人よ

ちり方の花に傷みの鳥がねを挽歌ときくもさ
びしらの春

東(ひがし)行く雲よ科野に面影のわが痛せやうを見に
きといはゝ

たゞひめてわれと我が泣く草の戸のゆふべを
行くよ小さき女(め)の魂(たま)



## さる人のうたへる歌（二）

これも同じ人のうれひにこもるさみしき
響ぞ、詩は眞情の流露なりとせば、このいと
しきこゑも、やがては人の心の糸にいひ知
らぬゆらぎをぞ傳ふめり

○

あさはまよふきりのうちにに
きみがすがたを見うしなひ
夕はまよふもやのうちに
きみがこゝろをうしなひき

あさはひとりきしにたち
ながるゝきりのひまとめて
きみがすがたをすかせども
かなしやそれも見えわかず

夕はひとりのべにいで
さまよふもやを分けゆきて
きみがこゝろをもとむれど
はかなややみにまぎれけり

夕はしづむ日のかげの



あしたのそらをちぎれども
かなしいかなやひとの身は
まつべき朝のありやなしや。

○

おもひをのせてはるかぜよ
とほくひがしにあまがけり
花の香にほふゆふまぐれ
こひしき君がむねに入れ

ほのかにさそふおもひでに
わすれしそらもかへるなり

あゝまぼろしのゆめにだに
きみがみむねにうかびなば

むかしたえにしよろこびの
きよきしらべもかへりなむ
うらなつかしきはるかぜよ
おもひをのせて君にゆけかし

○

われは野のはなさがひくゝ
たかきれもひもあらざれば
小ぐさがとこにひとしれぬ



さみしさこそはうれしけれ

さみしくかくていくとせよ
おもへばながきはるの日を
けふもこもりてくさの戸に
かきのひばりのこゑきけば

かきのひばりのうたきけば
こゝにもはえのゆめかよふ
さばくるゝまでふえふいて
まきばのくさにひぐかせむ

○

すゝき原(ばら)うれよりうれとたどりつゝおもひはてじつくま野にきみとわかるゝわがそでを秋のかぜふくうすれゆくゆふべのくもやにしひがしゆくへもしらずあふぎつゝきみをれもへばいひしらぬなみだこぼるゝ



やまいくへみちははつともながれつゝときはすぐともなにしかもわすれたまはむれもひでのきよき岡(をか)べを

世はあきのひとのうれひをねどろかすあきのはつかぜあゝわれはいかにうたひてとほくゆくきみをなげかむ

○

よべおもかげのゆめにみて

いまはたきみがたよりえぬ
目見(まみ)しめらせてなぞもかく
さばかりひとのうれしきや

そはまだわかきあげまきの
をとめとこそはおもひしか
わかれてのちのひととせに
きみかくまでにおよずけぬ

くろがみながくやはらかに
うすまゆずみのなつかしき
あゝそのきみのうひすがた
むねにゑがきてゑまれぬるかな



○

ゆふべののぢにふみまよひ
市のどよみをきゝしより
しづけきむねになみたちて
まきばのそらをうたがひぬ

しらであるべきまどはしの
まぎれてむねに入りしより
われうたがひのひとり子と
なれし野道(のみち)にまよふかな

ふけののをぐさまきの牛
をかのみどりばのぢのはな
ひとつすがたにあぐみては
たゞはゑなきをかこつのみ

あしたののぞみよろこび
ゆふべのやすみなぐさめも
われやれごりのこゝろより
あまぢのはてにはふらしぬ

あゝうたがひのひとみより



あゝたかぶりのこゝろより
とはのやはらぎうしなひて
くれゆくのぢのしのびなき

ゆらぐ小むねをかきいだき
夕戸にすがりながむれば
つみかかすかにそらにまた
けうとき市のひゞきする、

# 袖几帳

杜外

黄金羽の鳥來て鳴けるむさし野の今朝の朝げ
を霞流れし

ねがひありてのぼるや長き石の段春淺き日を
椿こぼるる

夕雲の流るゝ方や五十里の北はよき國母いま
す國



おぼめきの或る夕ぐれの物おもひ袖垣ぬけて
梅白き道

月の欄干絽蚊帳をいでゝ母の名にやさしき姉
をまた泣かせまつる

歌によき夏の大和の青葉道此寺凡そ幾百つづ
く

別れては灯影にやせん憂き思ひ小狐鳴きて寒
き冬の夜

ともし火に旅の日記くる小木曾宿、野分に鳴る
よ大谷小谷

鳥ないて秋ろゞろなる小野川邊薄をいてゝ萩
をゆく水

香ぞ高き黄菊の宵やおもひねの枕に見えし面
影の君

とゞめあえぬ春の別れや明け方のかすみの袖
にまぎれて行く君



夢占をわれに告げくる心地しつ窓の青葉に朝
を鳴く鳥

青淵に流れもあへぬ花のごとみどり葉透きて
見ゆる白雲

靜けさの落葉の杜に吹き落ちて夢安き戸の闇
を打つ風

## 筑摩よさらば

故郷よ國の鎭めとめさるべき吾をはぐゝみし
筑摩よさらば

筑摩野よ汝が暖き胸の戸は落葉かく子のうれ
ひも入れし

きけや君おかしき節もまじるべしこれや別れ
の思ひ出の歌

駒ながら歌ひて行かむ古郷の森に林におぼえ
にし歌

み空ゆく雲も流れてわれに添へ星も照らして
指せよ我旅

別れ行く里の名殘りにいとせめて令き名負は
せむなつかし小橋

と思へどおもへどつきぬふるさとの名殘の岡
や檜原松原

別れ行くわが故郷は草に木によそひし秋の光
沈み行く

○

暁の落葉の山の霜風に木の實とる子の吹かれて行くよ

新しき御墓の土の秋花に夕はかへれうるはしき子よ

兄が行く小野の眞萩の夕露によみがへりてもおもかげ見せよ



## 番ひ羽

柴垣

手に觸れば萎みもはてん草若葉あゐかなる香を慕ひこそ泣け

樺に鳴く鳥が音かすか流れ藻の靜にゆれて春の水行く

紅は皆若やぐ野邊の色にいてゝ春老いらくのいちはつの花

そゞろ心地小草細道ふと折れぬおぼろ月夜の
花白き里

さみどりの若葉が上のつゆの玉さやにも歌へ
朝の夏姫

今もなほ心れぼねの草深路合歓野河添ひ只西
へとぞ

若うてはとゞろく胸ぞおさゑあへぬ杜丹くづ
れて風薫る窓



身に泌むは來し夏姫が衣の香裳ずれさゝやぐ
若葉下風

うら枯れの柳林の日影浴び飛びても鳴けや小
さき秋鳥

朝戸出の夢や流さん水めぐれる村の卯
の花垣根

草野いでゝそゞろあひ行く小野川邊野うばら
白うたそがれの村

かゝる時よりてすがらむ御手もがな闇を落ち
ゆく秋潮の音

香ぞ高き若葉の杜の下道にまぎれも行かむ我
ひるの夢

涙もて湛ふる胸に來てもうつる君は露野の紅
きうばら

爐によりて露のぬれ衣干す一日わりなや老い
し母に泣かるる



暖き海のうしほにさそはれて淡雪とくる岡の
いさご原

限りなきみどりの陰にたゆたひつわれと眞ひ
るを夢路につなぐ

つゝみあへぬ思ひよ深くかよひ行け夏あさあ
けの森かげの家

## 杜外を送る

柴垣

別れてはうれひにこもる冬の日のしゞまの窓
をめぐる夕風

ますらをのをゝしき旅といふにだにおさへか
ねつる胸のさみしみ

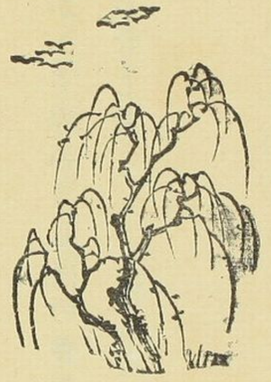
春花(はるばな)もとくうつろへや紅葉(もみぢば)もとくあせよかし
君かへるまで

秋鳥や小春日和に若やぎて友ほゝゑまむ音(ね)に
も鳴けかし

湧きかへる春のうしほの香やしめむ若やぐ色
に別れにし君

山上　終

# 湖上



# 湖

## 上

# 序

友なる太田みづほのやの歌集を世に出すべ
ければ其ついでに我作をも添えよと是れも
友なる金色社主人より云ひおこせたり。余は
甚だ文藝を好めども閑少くして多く作るを
得ず。従つて世に示さんと思ふ程のものもな
し。僅に輯め得たるところを通讀するに我な
がらまだしく見ゆるが多きを讀まん人は藝
術の園に斯る雑草とも見給へかし。

明治三十八年春

山百合生

# 諏訪行

伊藤左千夫

蓼科や、御湯湧きたぎつ、湯の川に、うてるやまめか、水
ぬるみ、産せる芹かも、ねもころに、うまらに煮しを、雪
霜の、夜邊のあつもの、後もふらんか。

○

天そゝりみ雪ふりつむ八ヶ岳見つゝを來れば雲岫
を出づ
久堅の青雲高く八ヶ岳蜂八つ並ぶ雪のいかしさ
岡のへの茅生の茨の立枝は茜せりけり霜を

しみかも

北山の夕照る岡に立つわれを遠にとりまく信濃群山

雪つめば河にたはめる呉竹の葉群葉毎に垂氷せりけり

目次

諏訪歌
須波湖畔に立ちて
町に立ち燕を見てよめる
橋上
毛孫子を送る
出征歌
さにあらじ
おもほへば
鳥の歌
自嘲歌

# 湖上山百合

## 諏訪歌

健御名方（たてみなかた）
神のみことの
かむうつり
御座高知（みくらたかし）り
いや古（ふる）の國



奮慨行
市隱
小說の後に
桑摘歌
鍬始
冬(一)
爐邊懷故人
左甚五郎
偃松の標本を贈るとき
時雨
冬(二)

たゝなはる
嶺高かくむ
みつうみに
冬さり來れば
氷はる國

昆崙の
山なみ千なみ
青雲の
空にきはまり
湖清き國



なまよみの
甲斐が根を超え
三千尺の
たか原のうみに
みふね漕ぐ國

山すその
野路のをすゝき
打ちなびき
ゆくてに不盡の
小さく見ゆる國

み冬月
雪はだらなる
荒磯田に
いでゆのゆげの
立ちのぼる國

日本べに
山はおほけど
くすりぐさ
いただきのくもに
ぬれてさく國



山びとら
寒天つくらすと
わたつみの
みるめをはこび
ゆきに晒す國

生糸ひくと
甲斐の少女ら
春きたり
山べさむけみ
冬はかへる國

# 須波湖畔に立ちて

靜けき朝は寢覺して
戀なき老の胸にあけ
寂しき湖は山深き
信濃の谷にひらけたり

東に立てる蓼科の
山なみ長くかたふきて
風吹きまよふ雲の下
川藍色に行きめぐり



西に入る日の空のよそ
高きをきそふ御嶽の
木曾のみやまのむらさきも
遠く落ちたる湖や

さびしくひろき國の上
翼をのばす荒鷲も
菅の荒野の森かげに
夕すがたをひそめたり

都五十里登り來て
三月岸に草生ひず
八月飛彈の乘鞍の
高根の雪を仰がしむ

十月風の吹き落ちて
諏訪の榛原早く枯れ
さびしき冬の湖に
堅き氷のとづるころ

くれゆく沖の三日月に
橇曳く歌をきく時は



南より來る甲斐人を
愁ひて北に急がしむ

時は流るゝ水の如
千とせも空し大神の
健御名方のあとどころ
南の岸に今あれて

さむく立ちたる石垣の
水にのぞめる古城は
柳おとろへ松やせて
波の光を沈ましめ

長き大手の槻並木
ちりつくしたる木の間より
透いて見えたる白壁の
夕日もさびし山の町

あゝはるかなる天の戸に
月日の懸り照るきわみ
湛へし水は山深き
信濃の谷に静なれ



## 町に立ち燕を見て よめる

ふるすにかへれ
つばくらめ
日かげはそらに
めぐりたり

あさくかすめる
山ばたの
みちかき麥に
腹すりて

堤路ながき
　里川の
柳はるかに
　まひあがり
入江にぬるむ
　みづかがみ
たびのすがたを
うつしつつ



湖しづかなる
　町の上
つばさをあげよ
　つばくらめ

人は西より
　東より
和田の高嶺を
うちこえて

うたひてすぐる
かごかきの

諏訪の驛(うまや)は
いまあれて
けぶりむなしき
いへのかず
ながき汀(みぎは)に
うつりつつ
さびしき山の
湖(みづうみ)に
うたひてかへれ
つばくらめ



わびしき人の
戸により
百(もも)とせのよを
おもひつつ

はるかに水を
のぞむとき
夕日のひかり
おちしづみ

つまにわかれし
　わかうどが
春新しく
　愁ひつつ
山川とほく
　あふぐとき
かすみは流れ
　ゆきまよひ

かくておとろふ
　ふるさとに
うたひてかへれ
　つばくらめ



## 橋上

（池田を去るとき）

さらば手をこゝに分たん
高瀬川かすみに落ちて
遠き水、南に流れ
安曇野の境をかぎる

送り來て見上ぐる子らは
我がために三年（みとせ）の弟
立わかれむかふ雲井は
春さむき野べのをちかた

そり橋の柱にもたれ
山川の遠きを眺め
打けぶる柳の末に
人、もろきさだめを思ふ

北の郡（こほり）、池田（いけだ）の里に
學びやの水に臨みて
櫻さき花ちるかげは



思出のたのしき園生（その）

その園の草をしきつゝ
子らと我がうたひし歌は
あたゝかき胸をつたひて
思なき耳にひゞけり

春くるゝ一里の堤（つゝみ）
思出のかうべを垂れて
愁ひつゝ岸に臨めば
春かすみ空しく流る

胸よわくさすらふ人が
かりそめの情にあひて
見よ三とせ笑ひの影は
一あさの涙に如かず

かくしつゝ誰か別れぬ
さらば只行くに任せよ
手をとりて再び見れば
空の鳥さへづりむせぶ

その山も霞にうもれ
その川も森にかくれよ



あゝ一人眼とぢつつ
遅々として車上のおもひ

## 毛孫子を送る

この水　この山
あゝ秀才　つひに去るか

冬日落つる　雲の光
四里の波　湖嵐なり

一旗亭　君誦しやむで
杯を嘲む　寂しき疎髯

酒冷えし　たかつき把て
すゝむる手　情に堪へむや

盗み猫　爐にねぶり
忠狗夜　土に凍ゆ

落魄の　手をとつて
說く勿れ　道のさだめ

默笑の　君が頰に
うらぶれの　影のかなしみ

この水　この山
あゝ秀才　遂に去るか



靴つけて　霜を怖れよ
五十里の　旅の凩

## 出征の歌

曉深く山に入りて
冬木を樵ると斧をあぐれば
ひらめく光に心さわぎ
樵夫急ぎて家に歸りぬ

山田の雪に土をもとめ
血氣の足に麥を踏めば

下萌の芽に心動きて
壮者いそぎ里に飛びぬ

科野の山の深き谷に
千古しづまる健御名方
あした異霊を里に傳へて
大神早く海を渡りぬ

東の海の王の剣
此の時恰も鞘を拂へば
四千万人光を望みて
山川草木渾べて城壁



樵夫は斧を庭に擲ち
一人の妻の幸を禱れり
農夫手馴の鍬を擧げて
殘れる子らに家業をさとしぬ

女の胸に涙あるは
男の腕に剣あると同じ
暁の灯に衣を縫ひて
樵夫の妻は旅を思ひぬ

山の氣稟けて山の氣象
幼きものは畠を鋤きて
家にあらんと門の外に
農夫の子らは父を祝ひぬ

諏訪の山風旗を吹いて
里の四辻酒を置く人
見つつ送れば谷の隈々
增良猛雄の行衛しらずも

大君の
みことかしこみ



いそにふり
海原わたる
父母をおきて

## さにあらじ

さにあらじ彼の下駄音は
わぎもこのかへりにあらじ
春の宵下駄のひびきの
耳につく道のをちかた

山幾重、遠くさかりて
空いく重、海をわたりて
世の旅にさすらふ人も
年ふれば家路をおもふ

わぎもこは此の世をはなれ
静かなる心となりて
かの山の石にあなれば
何時の日か歸りをまたん

やうやうに近づく音に
おそましく胸さわぐなり



軒に猶たゆたふ如く
遅々として下駄の小刻み

さにあらじ彼の下駄音は
わぎもこのかへりにあらじ
春のよのおぼろの影は
今、去年の夢に似るとも

やうやうにさかりてひびく
かの下駄の遠音を追ひて
すさまじき寐耳そばだて
さびしさに耽るわが胸

# おもほえば

おもほえば
　君が如くに
何ものか
　静かなるべき

北の海
　氷の山も
めぐる日の
　光に流る

熊こもり
　ねむれる森も



大そらの
　風にさやなる

ああ一人
　眼(まなこ)ふたぎて
君のみぞ
　静なりける

枕べに
　夫(つま)はまろびて
君が名を
　なげきよべども

殘る兒は
　いはひまつはり
君が乳を
　胸にさぐれど

とこしへの
　わかれのみちに
あゝ君が
　やすきおもばせ
（とこ）床に落ちたり

にぎりたる
　今はのうでの
そのちから
　ちぎりのまへに
一よさの
　はかなきさだめ

言はぬこと
　さはにつもれば
殘るむね
　なげき裂くなり

眠る子の
　ひざに馴れねば
その母を
　したひ泣くなり

守謠に　背をばゆすりて
男我れ　おろ〳〵泣くなり

草がくれ　胸の泉に
湧くなみだ　遠く流れて

とこしなへ　君が園生に
思出の　影をひたすも



およすけん　振わけがみに
秋は花の　千草さゝげて

いとし子は　みはかのまへに
たもひての　影をおふとも

おもほへば　冷たき土に
一人して　静かなる君

# 鳥の歌

冬の入日の雲を染め
彩ある羽を照らせども
くぬぎの草木皆枯れて
鳥の心を愁へしむ

北の谷間の冬木立
風、枝を吹く巣を出でて
南の海にあたゝかき
雲井のをちの島をおもふ



心はるかに朗かに
天風、胸の毛を吹いて
双の翼をのばさんに
さはるものなき沖のはて

そぼふる花の雨にぬれて
うたは木蔭にをかしかれ
綠の草を結びてぞ
夢は寢覺に泣くべけれ

のんどの管に風滿ちて
聲、わたつみの船に落ち

影、纖雲を貫いて
人、天末を打仰ぐ

滿を引いたる胸の矢の
日かも射さけん力さへ
夕の沖の凩に
翼いためし悲しびや

鳴音もさむし西の日の
落つる光を身に浴びて
いたましい哉谷の巢に
今將た歸へる鳥の影



うするゝ光、迷ふ雲
翼のはてもかつきゆる
今はの野邊の荒寥に
我立ちうたふ鳥の歌

## 自嘲歌

家を成さざるもの、春を愛し
家を成すもの、秋を樂しぶ

家成らず、事成らず
春もなし、花もなし

洛外の柳枯れて
朝寒(あさざむ)の旅に行く

## 奮慨行

皮を剝げ　刃(やいば)もて
君が面(おも)　何ぞ美なる
流るゝ血　腥(なまぐ)さや
蔽ふ勿れ、そは誠の色
馬糞の如　きたなき哉
あゝ汚穢　君が肉



曲れる哉　君が骨
驚いて　鼻を閉づ

鶯、そは　巧みに歌ふ
雲雀、そは　よくしやべる
君が唇　流水の如く
君が舌　落花を浮ぶ

碧池の波は　柳糸を揺かし
月前の琴は　行雲を驚かす
嬝々たり　君が容
艶々たり　君が姿

生れ得て　少才子
交え得て　豪傑の士
洛中　子女の袖
燈前に　怨を噛む

春の夜の　朧月
我と與に　如くものぞなき
擾々たり　天下の事
さしまねく　掌の上



色、そは　包めるもの
姿、そは　重寶のもの
口、そは　蔽へるもの
才、そは　浮べるもの

我惡魔
先づ君が
我非情
腥き

刃を執て
胸を摧く
刃をとつて
肝を抉る

我惡魔　指を折て
舊惡を　こゝに數ふ
白日　天に向つて
我惡魔　高笑ひ

うばらげに　清くして
罪もなき　足を傷く
惡しからず　少才子
恐くは　世を毀(やぶ)る



天に乘じて　土に降る
我はこれ　大皇の民
この刀　長へに在て
願くは　奸人に加へん

## 市隱

（長野にありけろ時）

一

山といひ　森林(もり)といふ
我ひとり　市の人

松の風
　軒に入り
夕日かげ
　窓にさす

人の聲
　弦（いと）の音
さまたげぬ
　心かな

二

柴（しば）の門
　おそくあき
夜のともし
　早く點（つ）く



おもしろや
　ふみ讀んで
今日もまた
　暮の鐘

鳥の聲
　水の音
夢やすき
　軒端かな

## 小説の後に

ある夜ひそかに
　わぎもこの
寝息をはかる
　まくらもと

そと火をいるる
　行燈（あんどう）は
心のやみに
　さしそひぬ



裂けや清七
　紙のべて
ながかきそむる
　こひのふみ

いくら思を
　かさねきて
こゝに忍べる
　ほかげぞや

吹かば消えなむ
　ともし火に
歌のつゞきの
　にぶらんを

ふでを持つ手は
　わなゝかず
我がむね已に
　決したり



耳をおほへよ
　寝おびれて
なが名をよばふ
　つまの聲

思へ咫尺(しせき)の
　まくらべに
何もしらざる
　夢あるよ

汝(いまし)がために
　櫛入れて
あした梳(けづ)りし
　みどりがみ

きりとむすびし
　赤珠(あかだま)の
ねがけにうつる
　ともし火や



神かもねむる
　顔ばせに
筆をはばかる
　眼(め)のくばり

かしくとかいて
　次の名の
あゝ燈火を
　ふきけちて
清七が見る
　ゆめのくるしみ

## 桑摘唄

村の小娘
　竹籠提げて
赤い襷で
　何所行きやる

鳥と遊んで
　聲よい端唄
星を眺めて
　涼しいまなこ



桑をつむなら
　大丘小丘
桑が茂つて
　背丈が見ねぬ

水を飲むなら
　谷川野川
野邊の茅萱が
　行瀬になびく

父が律義で
　この丘買うて
母がやさしゆて
　この衣織て

一人育の
　すなをな氣だて
夏の日ざしを
　小笠によけて



にくや桑葉の
　梢のあらし
娘、小指が
　屈かぬならば

娘、小指に
　誰が手を添へて
摘んでやるなら
　屈くだろ

# 鍬始

谷の底なる一つ家の
軒下に湧く眞清水を
産湯につかひ生れ出でて
六十路の老となりにけり

山に樵りて筋つよく
野に耕して骨太く
祖三代のなりはひを
靜けき山につたふかな



森の氣を吸ふ我肺は
岨道三里いきづかず
斧ふりあぐる胸鉏は
黒金たゝく響あり

髪は林の露を浴びて
雪の眞白に光れども
岩根ふんばる我腰は
眞直に天の日を拜む

海へ五十里千船つく
花の都をなほ知らず
魂合ふ妻と二人すみて
粟の飯こそうまく食へ

今年元旦未だ暗く
厨にうちし石の火に
歳神早く來ますべき
草の戸古き例かな



三百日のいとなみに
一日の力ゆるぶべく
古甕の酒妻と酌んて
顔笑み並ぶ老姿

神灯の下に枕して
初夢さむる朝の吉
まづ東雲の戸を押して
星の光を入るゝかな

惠方にそなふ家の具の
中に今朝とる鍬始
鍬の長柄の注連蓁に
あしたの風の吹き流る

尾根の冬木に鳥鳴いて
霜ほの〴〵と谷あかり
とくこもり立つ山畠に
天つ日くわつと今あくる



仰げば高き瑞雲に
五色の彩の動くとき
鍬ふり上ぐるひらめきに
光を授く天つ神

雪三寸の土の下
麥の新芽の迸り
鍬うちおろす一念に
力を授く國つ神

空にかざせば空の幸
地をたゝけば地の幸
讃歎汗の滴つて
山上の風顔を吹く

始もしらず人の世に
終もしらず老いたれど
我腕に血のあるところ
明日の憂を抱き見ず



三鍬すきぞめすき收め
おはりの鍬の柄に倚つて
六十年の山川を
喜びの眼に望み見るかな

## 冬　（一）

うら畠の柿、冬枯れつくし
網の如き枝、天にひろがる
青空の日は幹に透けども
冷たき土に霜柱立つ

かゝる日課題の歌を得んと
信濃の冬を望み立てる
わびしき我の瘠姿は
年老いて病める狸に肖たり

妻はあれども子を生み得ず
白日厨に水をいびり
明りけうとき小窓の下
あかぎれの手にきさと釜とぐ



雲灰色に谷を流れて
外山草山西に嵐せば
草家の烟屋根を切れて
諏訪の寒村暮色せまる

山に生れて山をさむがり
冬籠る輿に雲を愛す
十畝の庭の石に立ちて
夕日を送り仰ぎみる哉

山浦（やまうら）の
くはしをとめら
萱かると
こもりし野邊は
枯れにけるかも

## 爐邊懷故人

床（とこ）の柱に
うつついて
玉水仙の
花の下



冬嶺松の
雲に坐す
君に驚く
晝の夢

## 左甚五郎

腕の力を
うちふるひ
灯（ひ）の下（もと）、竹を
刻むかな

寒水口に
　ふきかけて
水仙ぱんと
　ひらいたり

## 偃松の標本を贈る

天女下りて
　舞ひしより
山上の松
　皆偃へり



八月の風
　吹き通す
大きな石に
　晝寢かな

## 時雨

狐嫁入
　日がさして
鼻さきの山の
　時雨雲

貧學校の
　門柳
先生の帽に
　しだれたり

# 湖上（終）

## 冬（二）

夜學のあかり
煌々と
二十人坐す
古机

鄉先生の
低い脊が
論語の卷に
寒さかな

（以上七編明治卅八年作）



明治三十八年三月十五日印刷
明治三十八年三月二十日發行

山上湖上奥附
定價金貳拾五錢

編輯兼發行者　東京市本郷區彌生町三番地　山田肇

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　白土幸力

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三光堂

發行所　東京市本郷區彌生町三番地　金色社

著作權所有

## 特約大賣捌所

東京市神田區表神保町三番地　東京堂
同　神田區裏神保町一番地　上田屋
同　京橋區尾張町二丁目　東海堂
同　京橋區鎗屋町十三番地　北隆館
大阪市東區備後町四丁目　吉岡書店
同　東區南本町座摩前筋　杉本書店
京都市寺町通二條南入　若林書店
名古屋市本町三丁目　川瀨書店
金澤市片町　宇都宮書店
熊本市新町貳丁目　長崎書店
久留米市米屋町　菊竹金文堂
信濃長野市　西澤書店
信濃上諏訪町　宮阪日新堂


◎金色社獨特特裝釘粹麗◎

▼伊藤銀月君著▲

# 小說 町の仙女

口繪　小川芋錢君畫
表紙意匠　平福百穗君案

好評參版

●町の仙女は明治文壇の奇才子伊藤銀月先生が後にも先にもタッタ一度び試みたる新作小說なり小說的敘事詩の最も上乘なるものなり

●町の仙女はさる有福町人のダダッ兒より一轉して市上の女優となり山中の針女となり大學生のラバアとなり哲學者の妻となり海賊船の女王となる一怪美人を捕へて麼が運命の流轉をば縱橫に描けり

●町の仙女は銀月式美文の特徵最も能く現はれ構想は靈妙插話は奇峭印象は透徹文辭は痛勁熱烈眞に一世に冠絕して千歲に濶歩す可き也

●町の仙女は江戶趣味の墮落を痛嘆し平凡靜止をば非惡の如く痛罵せる天才の叫びなり所謂熱時人を寒殺し寒時人を熱殺せずんばやまず嚙みしめれば嚙みしめる程味のある銀月式美文中の最長編なり天下の珍品なり

クロース裝釘
全一冊最美本
定價六拾五錢
郵稅八錢

◎金色社獨特裝釘粹麗◎

▲田口掬汀君著▼

家庭小說 女夫波

口繪 鏑木清方君畫
表紙意匠 平福百穗君案

●女夫波は永遠の力として愛の發展を描きたる高尚純潔の家庭小說にして其女主人公は意思強き明治新婦人の好模型なり

●女夫波は其讀者中一度び互に冷却せし夫妻間の舊情溫を回復倍加して一家團欒の破綻を救濟せし實績を有せり

●女夫波は互に好配偶を得て愉樂なる家庭を造るべき活ける敎訓書たると同時に詩趣橫溢の中生活の眞意義を照耀す

●女夫波は一家團欒の席に繙きて趣味と感化とを及すべき家庭向き作物として一般批評家の公認を得たる明治文壇の光彩なり

前編九版
後編六版
クロース裝釘最美本
定價各一冊六十錢
郵稅一冊八錢
小包料二冊拾五錢

◎金色社獨特裝釘粹麗◎

●坂井久良岐先生著

クロース裝釘最美本全一冊實價五拾錢郵稅六錢

表紙畫 圖案俱樂部案
口繪 阪井紅兒君畫

▲家庭の間に諷詠すべく改良されし新川柳集

▲現代の人情思潮を正直に反映する新川柳集

滑稽文學 川柳久良岐點

（附）川柳慨言 川柳講壇

（再版）

▲科學的研究口語式

▲江戸前の新風味

▲川柳道の新光明

駄洒落 當込み クヅグリの三邪を叱して
可笑味 輕味 穿ち の三美を鼓舞せり
附錄二雄篇能く川柳の解法作意を說明して
懇篤に全編五百頁尨然たる無前の珍書なり

◎金色社獨特裝釘粹麗◎

田口掬汀君著
平福百穗君畫

# 小說 新生涯

（好評參版）

洋裝最美本
定價五十八錢
郵稅八錢

『新生涯』は堅固なる理念を保ちて世の迫害に抗して進む青年と薄倖の佳人との間に蟠れる奇しき運命を寫した長篇小說である、情が勝つか理性が勝つか……人間生存に最も必要なる此疑問に答へるのが『新生涯』の主眼である。

『女夫波』によりて靄然たる、溫味を貪ぼりたる讀者は更に此篇に就いて可憐の野花が暴き風雨に揉まるるさまをも見給へ。着想奇拔、文情凄艷、明治時代を横流する人情の活殺は納めて此一卷中にあり。

◎金色社獨特裝釘粹麗◎

渡邊國武先生題辭
小笠原海軍中佐序歌
河井醉茗君著

戰捷紀念

# 劍影

平福百穗君畫
戰捷紀念繪葉書
挿入

新刊發賣
洋裝頗美本
定價金拾八錢
郵稅金四錢

▲劍影は詩題として日露戰爭を觀たる新體詩集なり
▲劍影は若き詩人の血汐もて日露戰爭を詩歌的方面より彩どれり軍國民の後援の餘韻なり
▲劍影は斯の軍國大時局に處せる青年詩人が憂國愛民の赤誠を披瀝せる高潮の叫を最も麗はしく詩化せり
▲劍影は文學的方面より觀るも情韻秀絶最も進歩せる唱歌集なり
▲劍影は絶好の戰捷紀念なり軍國稀有の好吟書なり
▲劍影は血なり涙なり然矣青年詩人の憤血なり感泣なり默誦に耐えず起ッて放吟すべし然矣全國民起ッて擧ッて高吟すべきなり

◎金色社獨特裝釘粹麗◎

英國ジョンラボック先生原著　說明圖及參考圖
日本正岡藝陽先生譯述　五十餘個挿入

# 自然美論

新刊發賣

クロース釘裝最美本
定價八拾五錢
郵稅拾錢

●自然美論は自然と人生との感通をば最も明確に理解せしめて自然と共に樂むべく極めて趣味多き研究方法を敎へ、文學哲學科學の調和を示せり。
●自然美論は花にも星にも自然の意義あり不朽の生命あるを說明せり、聖書に所謂蜜と乳とに溢るる樂土を說明せり。
●自然美論は先づ美と幸福論に着筆し、自然の愛、動物の社交、植物の活動、花界の歷史、山河湖谷の根元儀容爭鬪妖術より、延ては海岸論となり、兩極觀となり、最後に燦爛たる天空を精敘して星雲の飛動に筆を擱けり。
●自然美論は天地萬象に關する科學的智識と美的觀察力とを併せ與へ、趣味は豊溢、利益は無限、讀む者驚喜措く能はざるべし。